作曲者 **小出稚子**

Composer

Noriko Koide

東京音楽大学、同大学院修(2008)、ローム ミュージック ファンデーション奨学金、文化庁新進芸術家海外研修制度、デンハーグ王立音楽院より助成を受け、アムステルダム音楽院およびデン・ハーグ王立音楽院を修了(2009-2014)、インドネシア政府奨学金および野村財団より助成を受け、インドネシア国立芸術大学スラカルタ校でジャワ・ガムランの演奏と理論を学ぶ(2014-2015)。これまでに作曲を池辺晋一郎、伊左治直、遠藤雅夫、佐藤眞、藤原豊、福田陽、細川俊夫、Wim Henderickx、Martijn Padding、Yannis Kyriakides各氏に師事。オーケストラ作品《ケサランパサラン》で第17回芥川作曲賞受賞(2007)。その後、第76回日本音楽コンクール作曲部門第2位と聴衆賞、第18回出光音楽賞、アリオン賞等を受賞。2016年トンヨン国際音楽祭で初演された《布袋》で、アジア作曲家ショーケース・ゲーテ賞ならびに聴衆賞を受賞。自作自演ユニット「鬼子母神不眠ガールズ」、エロティシズムをテーマとするアート・ユニット「すけべ人間」各メンバー。

7.17 金 第387回 定期演奏会

中村滋延(作曲家、九州大学名誉教授、相愛大学客員教授)

日本のクラシック音楽演奏会においてはその演目の中核をなすのが18世紀後半から19世紀の初頭までの西洋人作曲家の作品である。大雑把に言えばハイドン以降ラフマニノフまでのヨーロッパの芸術音楽。日本ではクラシック音楽そのものがなかった時代も含むから、日本人作曲家による芸術音楽が少ないのは当然であろう。日本人作曲家の作品が国際的に評価されるようになったのは20世紀半ば以降のことであり、その多くは無調性の「現代音楽」として現れ、当然のことながら無調の響きに慣れない聴衆からは忌避された。聴衆にとっては美しい旋律や響き、均整の取れた形式によって「耳の愉悦」や「癒し」を得るというのがクラシック音楽を聴くことの価値だった。

しかしクラシック音楽は耳の愉悦や癒しのためだけのものではない。それだけであればクラシック音楽に文化振興のための公的助成が必要だという議論は崩壊する。耳の愉悦や癒しを超えて、ものの見方・感じ方・考え方などに関して音楽でしか表現できないことがあり、そうしたことを大切にしなければ文化的豊かさを生み出し得ないという共通認識が存在してこその議論である。それを忘れてはならない。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)
エグモント 作品84より 序曲

1778年にゲーテが書いた悲劇『エグモント』のための付随劇音楽としてベートーヴェンが作曲した一連の音楽の中の「序曲」。エグモント(原名はエフモント)はスペイン圧制下のオランダの貴族であり、オランダ独立のために戦うものの、仲間の裏切りにあい死刑に処せられた悲劇的英雄である。圧政に対して反旗を翻して死をも厭わぬ人物といういかにもベートーヴェン好みの人物である。エグモントの事績や彼に対して人々が抱く英雄的イメージが9分ほどの音楽にみごとに凝縮して表現されている。

曲はヘ短調。全体は序奏部－主部－結尾部から成り、主部はアレグロのソナタ形式である。序奏は大地を踏みしめるような弦の低音域の力強い音型で始まる。エグモントの強い意思の象徴のようだ。ついで木管によってエグモントの民への慈愛を表すかのような旋律が現れる。主部の第1主題は2オクターブ近く下行する主和音の分散和音を軸にした旋律で、エグモントの悲劇的最後を予期させる。第2主題は序奏冒

頭の音型のテンポを早めたもの。結尾部は一転してヘ長調になり、悲劇の後に訪れる歓喜によって終わる。

作曲／1810年　**初演**／1810年5月24日、ベートーヴェン指揮、ウィーン・ブルク劇場
編成／フルート2（ピッコロ持ち替え）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦5部
使用楽譜／ブライトコプフ&ヘルテル

矢代秋雄（1929-1976）
ピアノ協奏曲

矢代秋雄は著名な美術史家・美術評論家で東京美術学校（現東京芸大美術学部）教授の矢代幸雄の長男として生まれ、幼少より学術・音楽のエリート教育を受けて育つ。東京芸大音楽学部卒業後すぐにフランス政府給費留学生としてパリ音楽院に留学し、そこで5年間学び、帰国後に母校の作曲科の教員となった。アカデミックな作曲技法を極めた作曲家として、それを次の世代に伝える教育者として、そして楽壇からの大きな期待を受ける作曲家として、矢代は完璧主義者であり、きわめて寡作であった。

この曲は急－緩－急の三楽章制の古典的なピアノ協奏曲の外見を示す。形式的には自由だが古典的な均整は揺るぎもない。矢代自身がピアニストとしても活躍できるほどの腕前だったのでピアノパートは弾きごたえ十分で、特にカデンツァはピアニストの技巧アピールのための最適の素材であろう。

第1楽章冒頭、限られた数の音高からなる主題をピアノが弦の持続音の上で柔らかく提示する。主題は出現の度に変容され、時にはきわめて劇的な相貌を見せ、その変容の多彩さに息をのむ。**第2楽章**はドの連打によるリズム音型を反復し続ける。中間部においてピアノのユニゾンによって展開される装飾音が多用された朗唱風旋律がじつに魅力的。**第3楽章**は運動性に満ちた音楽で、変化に富み、聴いていて理屈抜きに興奮を覚える。またこの楽章前半に挿入される大規模カデンツァは協奏曲の伝統と現代性とのみごとな融合を示している。

作曲／1964年～1967年　**放送初演**／1967年11月5日、中村紘子独奏、若杉弘指揮NHK交響楽団　**初演**／1967年11月29日、中村紘子独奏、森正指揮NHK交響楽団
編成／ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2（バスクラリネット持ち替え）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、タムタム、ウッドブロック、鈴、チューブラベル、ヴィブラフォン、弦5部、独奏ピアノ　**使用楽譜**／音楽之友社

小出稚子（1982-）
博多ラプソディ（世界初演）

「博多祝いめでた」「ぼんちかわいや」「山笠とどんたくの祭りの音を使った情景描写」この4つがこの作品のキーワードです。

冒頭は山笠櫛田入りの様子を描いており、太鼓の音から出発します。その直後、金管楽器が一つずつ音を増やしてハーモニーを組むパッセージがあり、これは山笠の6本の舁き棒と前方の台上がり3人の有様から導き出しました。このパッセージは曲のあちこちで出てきます。

続いて「祝いめでた」をモチーフにした速いテンポの緊張感のあるメロディが現れます。曲全体で時折、1つの音に別の楽器で同じ音程の音を重ねていくモチーフを使用していますが、こちらは1つのポジションを舁き手が入れ替わりながら繋いでいく山笠からヒントを得ました。途中、どんどんテンポが上がりますが、これは山笠と大勢の舁き手が呼吸を揃えてダイナミックにカーブを曲がるところを表現しています。

続いて、趣向を凝らした出し物が次々と現れるどんたくパレードの描写に入ります。「ぼんちかわいや」のメロディーを元にした様々な変奏が手を替え品を替え繰り出されます。しゃもじのリズムは、実際踊っているときに叩くリズムをそのまま使っており、お座敷で歌われる際の三味線のリズムも弦楽器がピッツィカートで担当しています。

さて、ここまでの流れが一旦収束すると、「祝いめでた」の一部をハーモナイズしたものが厳かな雰囲気でゆったりと弦楽器によって演奏されます。その後前半の雰囲気をもう一度振り返り、締めは博多手一本のリズムで幕を閉じます。

編成／フルート2（ピッコロ持ち替え）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、バスドラム、スネアドラム、サスペンデッドシンバル、トライアングル、グロッケン、ビンチャイム、ウッドブロック、トムトム、ギロ、しゃもじ、やぐら太鼓、弦5部
使用楽譜／ショット・ミュージック

※「博多ラプソディ」のプログラムノートは、編集の都合上、作曲家ご本人に書いていただいています。
※編成は使用楽譜に基づくもので、演奏の都合上異なる場合がございます。ご了承ください。